

# 奥信濃文化

第41号

別刷

## ◆ 目 次 ◆

寺町で育まれた人々	村松 和夫	1
飯山の道路元標(飯山地区・瑞穂地区)	植田 平	6
今は無き・小菅の棚田	吉原 正治	9
○ 古墳とは何か?世界性をもった古墳定義の提唱	松澤 芳宏	13
飯山市綱切橋の由来を考える	松澤 芳宏	16
国策「満州開拓」の悲劇から平和のために問うべきもの	藤木 義博	19
明治期における感染症と祭礼	望月 静雄	25
発掘された「ちっちゃいもの」	飯山市ふるさと館	30
あとがき		

2023年10月

飯山市ふるさと館友の会

## 古墳とは何か？世界性をもった古墳定義の提唱

松澤芳宏

古墳とは何か、その定義をめぐって大揺れに揺れる考古学界。筆者は前方後円墳などの成立をもって古墳の始まりする説などに反対の立場をとってきた。韓国以外の世界各国には前方後円墳は存在せず、前方後円墳成立説では世界性をもった古墳定義とはならないのがその理由である。

古墳の言葉は、もともと中国の漢字から成り立っている以上、最初から世界性をもっているのに

もかかわらず、近代日本の古墳定義はそれを脱却し、古墳にある一定の規格性を求め、本来の単純な古い時代の墳とは、かけ離れた古墳定義となってしまったのである。従って、外国の古墳と日本の古墳とは違うものとなってしまった。

日本語で世界の古墳を指す言葉に北アジアのパジリク古墳群、朝鮮半島の楽浪古墳・積石塚古墳、イギリスの古墳など既に一般化しているが、墳丘墓名称の流行により、それらの古墳を墳丘墓と呼称する人も現れている。

まさに、日本の古墳と墳丘墓の混乱が世界の古墳にまでも広がろうとしている。ある人は日本の巨大な前方後円墳を巨大な墳丘墓であるとする。それならば、弥生時代の墳を墳丘墓として弥生墳丘墓などとする通説との関連をどのように見るかであるが、両者とも墳丘のある墓所で、大小にかかわらず墳丘墓として同一の仲間であることは絶対的である。

つまり、そこに古い時代とか古代社会における意味で古の文字を付加すれば古墳丘墓として同一であり、とりもなおさず古墳（墳＝墳丘墓）として同一である。弥生時代から古墳時代まで古墳が存在するのである。

翻って、古墳の定義は世界に充てても、古墳の表記があることにより、世界性をもつことが大切であると思う。そして、世界性をもった古墳定義としては言語学に準じたものが最適であろう。



中国の故事では、墳は土砂や石で盛り上がった墓所を示し、墓は地中の墓所である。したがって、古墳とは言語学上からみれば古い時代の盛り上がった墓所、すなわち古い時代の塚にも含まれる意味もある。

ウェブ上で、古墳は古い墓として平安時代からあるとの説もあるが、それは墳が盛りあがった墓所であることが軽視され、早くから墓との区別ができなかったことの表れである。古墳＝古い墓は間違いである。

ところで、近代の最初の古墳の定義として高塚式古墳を略称して古墳としたようであるが、そこに間違いがあることに最近の学者はほとんど無関心である。高塚式古墳は古墳の中でも規模の大きい塚という意味があり、ここでの古墳の字の解釈は古い時代の墳であり、大小にかかわらず、古い

時代のすべての墳丘墓所と理解されよう。高塚式古墳だけを古墳と略称してしまうと古墳の語義と相反することになるのにお気付きであろうか。

最も重視しなければならないこの矛盾を無視したために、近頃の古墳定義が錯綜する時代が到来したのである。ただし、高塚式古墳時代そのものの用語は正しい。後記する筆者の大古墳時代と共通しているが、大古墳時代の方が、言葉が短く、響きが良いと自負している。

古墳は世界中にあり、もし、エジプトのピラミッドが墓所とすれば、これも古墳であり、中国の秦の始皇帝陵も古墳である。この他、日本の古墳に先んじて、先記した北アジアのパジリク古墳群（紀元前3世紀かそれ以前）や中国東北地方～北朝鮮の初期積石塚古墳（紀元前3世紀前後～）などがあり、大陸の古墳発生や流行にやや遅れて、その影響で、日本の古墳が築かれたことは疑いがない。

また、秦の始皇帝陵などを墳丘墓とし、日本の弥生時代の古墳を墳丘墓などとする説は賛成できない。墳丘墓と墳は言語学上では同じ意味となり、古墳はいわば古墳丘墓なのである。墳丘墓名称は必要がないが、墳の一文字で他者に伝わりにくいことで墳丘墓名称が流行したのであろう。あくまでも墳＝墳丘墓なのである。

ところで、最近、残念なことに韓国内の遺跡でも、日本語に訳して古墳と墳丘墓が区別され始めている。韓国ではなにを基準に古墳と墳丘墓を区別しているのだろうか？。そこでも日本の墳丘墓と古墳の矛盾のように、日本とはまた違った墳丘墓と古墳の定義が問題になろうとしている。

日本の古墳は弥生時代にもあり、弥生古墳という名称を使えばよい。ただし、その規模は小さく、次の古墳時代には大きな古墳が多数存在する。つまり、大古墳に象徴される時代を古墳時代とすればよいのであり、決して古墳の一形態の前方後円墳を代表して、古墳時代が設定されるわけではない。また、東北地方のように平安時代にも古墳が残るが、それは平安古墳とすればよいし、同じく中世の古墳が確認されたならば中世古墳でよい。

古墳時代は全長80m以上の古墳の複数出現をもって始まると、以前から定義しており、いわば大古墳時代が古墳時代である。大古墳に前方後円墳が多く含まれているが、前方後円墳や前方後方墳は弥生時代後期後半前後にも小規模のものが出始め（前方部前端を溝や明確な立ち上がりで区画した前方部確立型古墳が始まる＝第1図参照）、前方後円墳時代が古墳時代ではないとする立場をとる。

以上に記述したことや最近の古墳築造の実年代研究の状況により、古墳時代（大古墳時代）は3世紀中葉前後から7世紀ごろとなる。古墳時代の末期には全長80m以上の古墳がみられなくなるが、あくまでも大古墳の複数出現時期をもって大古墳時代の画期とした訳であり、終末期に関しては従来の古墳時代の画期に準じた考えを持ち、混乱を生じないようにしたい。

まとめとして、古い時代の墳（墳丘墓）が古墳なのであり、これは世界にも通用する定義である。日本では古墳は弥生時代・大古墳時代（古墳時代）・奈良時代・平安時代・中世にもあるが、墳丘があることで同じ古墳であり、それぞれ弥生古墳・古墳・奈良古墳・平安古墳・中世古墳などと呼ばれよい。なお、古墳時代の初期の古墳を発生期古墳・出現期古墳と呼ぶ必要がなく、あくまでも古墳時代初期古墳であろう。ただし、前方後円墳・前方後方墳などの墳形の発生期はあり、発生期前方後円墳の表記は在り得るが、それは古墳の発生ではなく、墳形の発生である。

余談にはなるが、発生期前方後円（方）墳は全長 20m内外の小規模のものが全国的に多数あり、前の段階の前方部祖形型古墳から文化的に変化してきたものであり、飯山市の法伝寺 2 号古墳、勘介山古墳、有尾 1 号古墳は前方部確立型古墳に含まれ、発生期前方後方墳かその系列上に存在する古墳の可能性が高い。背後にある政治的関連は現在つかめないが、統一政権に向かう動乱時代の文化波及の 1 現象と把握できようか。



第2図：飯山市史跡の飯山市大字静間の法伝寺 2 号古墳

飯山市教育委員会の範囲確認調査により、全長 23m 前後の前方後方墳であることが確定した。右手墳裾の周溝から北陸系の弥生後期末月影Ⅱ式土器高坏破片が出土し、土器の数が少ないことを考慮し、3 世紀前半～4 世紀初頭のいずれかが古墳の築造年代と考えられ、東日本最古級の前方後方墳の可能性もある。

因みに南西に隣接する 1 号古墳の現状は径約 26 × 22m の方墳だが、南方の丘陵端まで削平された余地があり、2 号墳より大型の全長 50m 前後の前方後方墳、もしくは前方後円墳の疑いがある。確認調査が必要である。

さらに周辺には小古墳と思われるマウンドがいくつかあり、令和 5 年 7 月、地元の小林千菊氏により 2 号古墳の前方部南端方向にマウンドが発見された。小古墳が存在する可能性が高い。

以上述べた記述は教科書とは違うが、日本考古学界の一学説として、ご笑納いただきたい。なお、内容はこれまでの論文の要旨とほぼ同じであり、詳しくは下記の参考文献をご参照いただきたい。また、引用した各氏の文献は論文の参考文献中に記述されていることをご了承願いたい。

#### \*参考文献

\* 松澤芳宏「古墳と古墳時代の定義設定の再考」『信濃』51の5、1999

\* 松澤芳宏「古墳の定義と墳丘墓名称の廃止について（北信濃北半を例として）」『信濃』59の2、2007  
(まつざわ・よしひろ 飯山市秋津地区在住)